（続紙１）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	柳楽　有里
論文題目	In Search of Inaudible Voice: Rhetorical Politics in Race and Gender in Gloria Naylor's Fiction （届かない声を求めて―グロリア・ネイラーの小説における人種と性の修辞的戦略）		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、黒人女性作家グロリア・ネイラー（Gloria Naylor）の作風の変遷と、その変遷にも拘わらずネイラーが一貫して描き続けた差別構造を、ネイラーの修辞上の戦略に着眼点をおくことで明確にすることであり、そうすることでアメリカ黒人文学におけるネイラーの位置を再評価することである。考察の対象としているのは、*The Women of Brewster Place* (1982)、*Linden Hills* (1985)、*Mama Day* (1988)、*Bailey's Cafe* (1992)、*1996* (2005)の五作品である。

第一章では、基本的な着眼点を説明するため、特に最初の三つの特徴を整理し、ネイラーの作風の変化を概観する。ネイラーの作風の変化を取り上げるにあたり、二人の先行する黒人作家、リチャード・ライト（Richard Wright）とゾラ・ニール・ハーストン（Zora Neale Hurston）とを比較対象にすることで捉え直している。ライトとハーストンの作風に関しては、ライトの *Native Son* を自然主義小説、ハーストンの *Their Eyes Were Watching God* をモダニズム小説と見なす研究者ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア（Henry Gates, Jr.）の『シグニファイング・モンキー』（*The Signifying Monkey*）に依拠している。ネイラーは、ライトに代表される自然主義的な作風から、第三作目の *Mama Day* では全く異なるハーストン的なものに変化していると論じ、続く議論の基盤とする。

第二章では、*The Women of Brewster Place* を取り上げている。この小説が、「夢」というテーマを自然主義作品に埋め込み、希望や理想を完全に否定することなく、マティという理想を夢見る登場人物に重ね合わせた点を指摘する。さらに、この小説における女性の結束の負の部分に着目し、この小説を崩壊へと向かう物語として捉え、ネイラーの語りの手法を考察する。ブリュースターに転居して来るまでの一人の女性マティ・マイケルの半生を描いた章が彼女の自己発見の旅となっている、というのが土台となる解釈である。そしてそこからマティの旅が目指す究極の理想とは要するにウーマニズムであり、その理想を追う過程で、むしろその理想自体がはらむ矛盾が明らかになっている点を解明する。さらにこの作品が、ウーマニズムの理想を求める努力に加えて、そうした理想によって隠蔽されがちな黒人女性たちの内側にある同性愛者に対する差別を問題化している点を指摘している。

第三章では、*Linden Hills* に使われている「白」、「黒」という色のモチーフと、「ドア」、「窓」のモチーフに注目し次の二点を主張する。一つ目は、ネイラーがアメリカのゴシック小説における「白」と「黒」の概念を反転させて描き、「邪悪」な「黒」として表象されてきたメカニズムに対して異議を唱えているだけでなく、キャピタリズムに傾倒する黒人中産階級内に潜む腐敗とその破綻を、「白」への恐怖と依存で示唆している点である。二つ

目は、「ドア」と「窓」の概念をアメリカ社会における黒人たちが直面した機会と重ね合わせ、黒人富裕層社会の内部の崩壊を描いている点である。黒人社会の下層に位置付けられている貧しい黒人男性、また、物理的にも下層に住むことを強いられている黒人女性という二人の描かれ方に着眼し、この二人の共犯によりネディード家は滅びている点を指摘する。

第四章では、第一作 *The Women of Brewster Place* や第二作 *Linden Hills* とは大きく異なり、ヴードゥーの呪術など黒人の伝統を多く含む *Mama Day* を取り上げている。先駆者ハーストンの「声」をいかに継承しているか、さらに黒人ヴァナキュラーに関する黒人コミュニティ内部の問題をいかに描写しているかに注目する。語る側の「声」とそれを受け取る側を用意したハーストンに対し、ネイラーの描く登場人物たちは必ずしも誰かに届くのを前提とした「声」を発していない。死者に語りかけるという、届かないであろう「声」を描いているからである。*Mama Day* において、直接聞こえない声の背後に意味を汲み取るというテーマが、作品の形式と内容に密接に関わっていることを考察している。この小説全体は三人称の語りであるが、それに混在している"you"とお互いを呼び合う語りは、実は死者と生者のダイアローグである。これと同じ形式は、スタンド・フォースと呼ばれる葬儀での儀式の場面でも登場する。さらに、死者を感じ取ることができ、黒人特有の言語を語ることができるミランダ・デイと、彼女の言語を理解できない黒人男性の双方を描出している。ネイラーのこの小説は、「声」に耳を傾けることができる黒人だけでなく、それができない黒人を同時に描き出し、出版当時の黒人社会が抱える内部の問題を浮き彫りにしている、と論じる。

第五章では、*Bailey's Café* と *1996* を扱う。最初に、*Bailey's Café* における元黒人兵士ベイリーの語りの役割を考察する。枠物語となっている小説の第一章を取り上げ、この章に断片的に挿入されるベイリーの第二次世界大戦の記憶に着眼する。そして日本という外の敵に対して一旦アメリカ白人兵士たちと手を組み戦いつつ、軍内部に根強く残る内部の敵（アメリカ白人）と戦うという二重の戦いを強いられたベイリーの葛藤を明らかにする。次に、ネイラーが最後に執筆した半自伝的小説 *1996* について考察する。作家としての名声を失うかもしれないというリスクを負いながらも、国家安全保障（NSA）からの監視による被害を書かなければならない、と決意したネイラーの作家としての使命を読み取っている。

本論文は、自然主義作家としてデビューしたグロリア・ネイラーが、当初から、黒人たちにとってアメリカ社会における人種差別の影響から逃れることができないということを前面に押し出すのではなく、むしろ黒人内部にある、見えにくいより細かな差別集団を丁寧に拾い上げ、差別に抵抗する者たちの分裂と団結を描いている、と論じている。さらにネイラーが、書き進めるにつれ、より細分化された差別問題を取り上げるようになっている過程を解明している。さらに、作風という視点から考察する時、ネイラーの黒人作家としての位置は、ライトからハーストンへと移っていったのであり、そのような彼女の小説は、黒人たちが直面している黒人内部にある矛盾を、ライトやハーストンの技法を模倣そして改変し見事に描き出しており、これがグロリア・ネイラーのアメリカ黒人文学に対しての最大の貢献であると結論づけている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

アメリカ黒人作家として旺盛な創作活動を続けたグロリア・ネイラーは、黒人女性作家として初のノーベル文学賞を受賞したトニ・モリソン以降でもっとも注目された作家の一人であったが、惜しくも２０１６年、６６歳の若さで他界している。ただこの作家が書き残した作品群は、構造が複雑でかつ扱う領域も幅広く、読み解くのは容易ではない。本論文は、日本において論じられることの少ないこの女性作家の代表的な小説の特質を解明しようと試みたものである。

論文第一章では、*The Women of Brewster Place* (1982)、 *Linden Hills* (1985)、 *Mama Day* (1988)という三作品の特徴をまとめ、ネイラーの作風の変化を概観する。その際、リチャード・ライトとゾラ・ニール・ハーストンという二人の黒人作家を比較対象としているが、その論は、ライトの*Native Son*を自然主義小説、ハーストンの*Their Eyes Were Watching God*をモダニズム小説と見なすヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアの論に依拠している。そしてネイラーが、ライトに代表される自然主義的な作風から、第三作目の*Mama Day*ではハーストン的なモダニズムに変化していると論じている。ネイラー作品についての本論文の基調をなす概観であるが、evidenceが不足し、やや図式的な断定とも見えかねない点が惜しまれる。

第二章では、*The Women of Brewster Place*を取り上げ、この小説が「夢」というテーマを自然主義作品に埋め込み、希望や理想を完全に否定することなく、マティという理想を夢見る登場人物に重ね合わせた点を指摘する。ブリュースターに転居するまでのマティ・マイケルの半生を描いた章が彼女の自己発見の旅となっている、というのが土台となる解釈である。そしてマティの旅が目指す究極の理想とはウーマニズムであり、その理想を追う過程でむしろその理想自体がはらむ矛盾が露呈している点を明らかにする。さらにこの作品が、理想によって隠蔽されがちな黒人女性たちの内側にある同性愛者に対する差別を問題化している点を指摘している。このような指摘は、作品解釈に有益であると評価できる。

第三章では、*Linden Hills*に使われている「白」、「黒」という色のモチーフと、「ドア」、「窓」のモチーフに注目する。そしてネイラーがこの作品においてアメリカのゴシック小説における「白」と「黒」というモチーフを反転させて描き、「邪悪」な「黒」として表象されてきたメカニズムに対して異議を唱えているだけでなく、キャピタリズムに傾倒する黒人中産階級内に潜む腐敗とその破綻を、「白」への恐怖と依存で示唆していると指摘する。また、「ドア」と「窓」のモチーフがアメリカ社会における黒人たちが直面した機会と重ね合わされ、黒人富裕層社会の内部の崩壊を描かれている点も指摘されている。これら二つのモチーフはアメリカ小説ではしばしば見られるもので、その分析はやや新鮮味に欠けるきらいはあるものの、この章ではそれなりの説得力を持っている。

第四章では、ヴードゥーの呪術など黒人の伝統を多く含む*Mama Day*を取り上げる。そして先駆者ハーストンの「声」をいかに継承しているか、さらに黒人ヴァナキュラーに関する黒人コミュニティ内部の問題をいかに描写しているかに注目する。語る側の「声」とそれを受け取る側を用意したハーストンに対し、ネイラーの

描く登場人物たちは必ずしも誰かに届くのを前提とした「声」を発しておらず、死者に語りかけ、すなわち届かないであろう「声」を描いているという指摘は評価できる。さらに*Mama Day*において、直接聞こえない声の背後に意味を汲み取るというテーマが、作品の形式と内容に密接に関わっていることを考察している。そしてネイラーのこの小説が、「声」に耳を傾けることができる黒人だけでなく、それができない黒人を同時に描き出し、出版当時の黒人社会が抱える内部の問題を浮き彫りにしていると結論づけている。この第四章における指摘は大きな意味を持つが、この「声」がグロリア・ネイラーの文学の根幹にかかわると思われるだけに、考察がこの章に留まっていることは惜しまれる。

第五章では*Bailey's Café*と*1996*が扱われている。*Bailey's Café*論では、日本という外敵に対してひとまずアメリカ白人兵士たちと手を組み戦いつつ、軍内部に根強く残る内部の敵（アメリカ白人）と戦うという二重の戦いを強いられたベイリーの葛藤が明らかにされる。またネイラーが最後に執筆した半自伝的小説*1996*については、作家としての名声を失うリスクを負いながらも、国家安全保障 (NSA) からの監視による被害を書くと決意したネイラーの作家としての使命を読み取っている。

以上のように、本論文は、これまで論じられることの少なかったグロリア・ネイラーの小説のもつ可能性を、様々な分析によって解明した野心的な研究である。グロリア・ネイラーの作品は、日本においてほとんど翻訳されておらず、紹介的な解説すらも皆無に等しい。そのような状況の中でネイラー作品の構造を分析し、黒人文学という伝統におけるネイラー作品の特質を明らかにしようとした本論のもつ意義は大きい。本論文が扱う分野の研究は、アメリカ黒人文学研究全般に大きく貢献すると思われる。その意味で、共生人間学専攻思想文化論講座の理念に十分適う研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成３０年７月２３日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降